

はじめに（ご使用上の注意）

この度は本作をお求め頂き、誠に有り難う御座います。

本作は、魔法少女モノのオリジナル作品の番外編です（元のアイディアはTwitterで一部公開しています）。

また、本作の挿絵イラストは、筆者がAIで作成したものです。このため、挿絵の作風やコスチューム、アクセサリーなどにブレがあります。

しかしながら可能な限り、ストーリーと合うものを選択した積もりですので、「こんなシチュエーションなんだ」というところをお楽しみ頂ければ幸いです。

長々と書いてしまいましたが、次項から本作の本編が始まります。
お楽しみ頂ければ幸いです。

魔法少女ピュア・マール外伝

第1章 聖騎士陥落

「……くっ！……どうしてこんなことに……」
「……きやあああつつ！！」

森の方々から団員達の悲鳴があがるものの、その姿は杳として窺えない。

守護天使であるキアラの助言もあつて、敵を各個撃破すべく、森の中へ『誘い込んだ』筈、だったのに——でも結果として、誘い込まれ撃破されつつあるのは、私達だ。団員達は散り散りになり、つい先程まで傍らに居たキアラとも、いつの間にかはぐれてしまった。

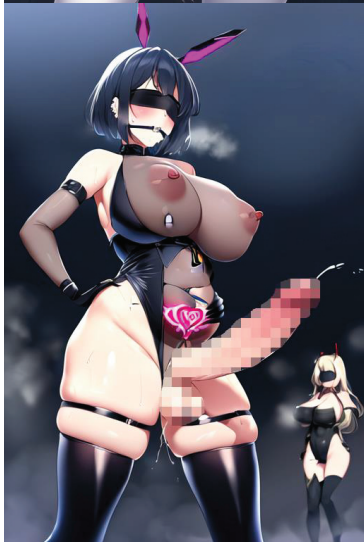


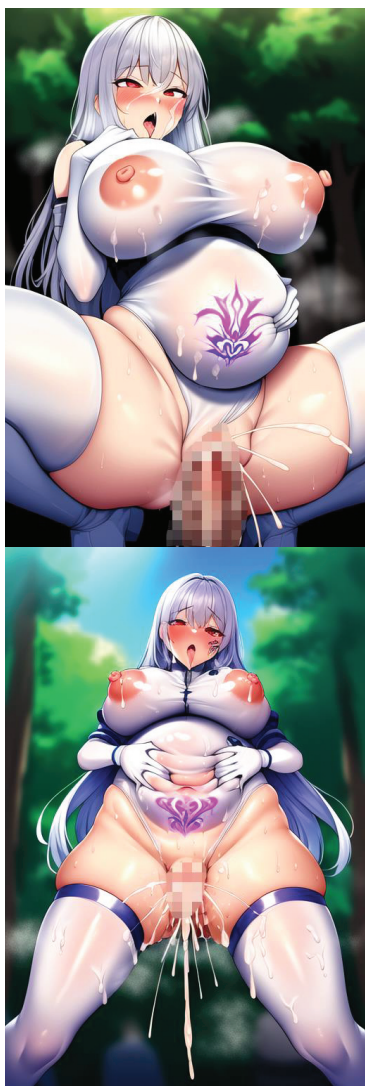
私達——『サルジニア王国聖騎士団』は、王国を突如襲い始めた『妖魔』を討伐する王国最強の剣——女性のための騎士団を結成した当初は、『お嬢様のお飯事』扱いであり、恥じらいも無く男性器を見せ付ける性隷兵の姿に、良家育ちの私達は戸惑ったものである。

しかし、屈強な男性騎士を擁する正規軍が、全く歯も立たぬ中、私達は戸惑いながらも着実に『敵』を討伐し、その嘲りを賞賛へと変えていったのだった。

そうして、私達の名声が馳せると、王国中から腕に覚えのある子女がこぞって集まり、守護天使であるキアラの力も借りて、団員の数と質は飛躍的に増し続けている。

今では、馬鹿にしていた男性騎士達も、私達へ一目を置き、貴族の中には浅ましくも、媚びへつらう者すらある有様なのだ。





全てが『裏返る』ような感覚と共に、『種』の中心ー子宮上へ淫紋が刻まれるのであるー
『・・・熱い・・・体が・・・中から灼けてしまいそう・・・でも・・・気持ちいいっ♡
♡・・・マール様、有り難う御座います・・・心からお慕い申しあげますわ♡♡♡』
その文字通り、身を焦がすような快樂とともに、マール様への愛情と畏敬が、全身を満
たしてゆく。そう、私は身も心も、マール様の『モノ』となったのであるー
「・・・ふふっ♡・・・『種』が定着したようね♡・・・カタリナ、お前が『芽吹く』様
を、私に見せて頂戴♡♡」

「・・・畏まりました、マール様♡♡・・・んふうっ♡・・・はあんっ♡♡」
ズボオツ、ブジュルウツ

「・・・よっ・・・っ・・・」

パシユツ、パシユツ

調整ルームに入り、お尻を固定座につけると、室内の機器からコードや無痛針がヘッドギアや私の体へと伸びて、『調整』の準備に入る。

私達性隷兵は、『兵』であると同時に、『兵器』でもある。そのため、将校級以上の上級兵は『調整ルーム』で、下士官級以下の下級兵は『調整タンク』で、肉体と精神の『最適化』が行われるのだ。

特に帝国への忠誠心や性欲の制御に劣る下級兵は、私室や兵舎が与えられる上級兵とは相反して、『調整タンク』が平時の『居室』ともなるのだが――



「・・・ふふつ、やっと会えた♡・・・久しぶりね、テレジア♡・・・会いたかったわ♡」

燃え上がる王城の熱風に髪を靡かせながら姿を現したのは。最も合い焦がれて、この場では最も会いたくなかった肉親――

「・・・カタリナ姉様・・・」

テレジアは、変わり果てた最愛の姉の姿に、二の句が継げずにいた。城の秘密通路を利用した、余りにも巧みな侵攻――『最悪の事態』は想定していたものの、それをいざ目の当たりにして平然していられる程、カタリナとの絆は浅く無い。それでもテレジアは、

「・・・カタリナ姉様・・・我等は王国を護る剣・・・よもや、その役目をお忘れになられてはいないでしょう？」

一縷の望みを掛けてそう、言葉を絞り出す。



「……うふふつ、テレジア♡……お姉ちゃん、とおってもキモチ良かったわよ♡……
貴女はどうだったかしら？……ふふつ♡♡」

己の種を全身に受け恍惚とする実妹に、尚も種を吐き出しながらそう尋ねる実姉―

「……えへへえつ♡……テレジアも……とおってもキモチ良かったよ、お姉ちゃん♡……お口の中あ、じゅぽじゅぽつてされるのお、とつてもキモチいいのお♡……
あんっ♡……思い出しただけで、オマンコ……イっちゃうっ♡♡♡」

ビクンツ、ビクンツ、プシヤアアツ

それにテレジアは、口淫の快楽を思い返しただけで再び、淫猥な言葉を吐きながら、潮を噴き出し達してしまうのだ―

